

IV-118

工事用ダンプカー通行の大原の文化的価値に対する影響評価

京都大学 正員 井上矩之

1. はじめに

京都市は市内での建設工事の廃土を市北部の過疎集落地区に運搬、谷を埋め立てて公園を造ろうとしている。廃土の処理、公園建設に加えて、過疎化した地区の復興をもくろむという一石三鳥を狙ったアイデアである。この工事のため廃土運搬のダンプカーが、途中の大原を、約十年に渡り通行する。一日に往復合計で約千八百台と計画されている。

大原は京都でも有数の文化観光地区である。工事車両の通行はこの地区の文化的価値を大幅に阻害するのではないかと心配の声がある。

土木事業の環境アセスメントの方法研究は、騒音・排気ガスなどに対しては相当進んでいるが、文化的価値に対するものはみかけない。学問的に価値のある一般的・普遍的な方法を編み出すのは非常に困難と思われるけれど、地域によっては文化的価値に対する何らかの評価をすることが土木事業の遂行上必要な課題であると思われるので、この事業がはたしてどのような影響を与えるものか、対象地域の文化的特性の視点から考察してみる。

2. 大原の文化的価値とは何か

その根源は建礼門院がこの地に隠棲したことにあろう。建礼門院は太政大臣平清盛の娘で、高倉天皇の妃、安徳天皇の母あり、その身分は人身を極め、世人の尊敬を一身に集めた女性であった。時が移り平家一門が滅亡すると、この大原の地に隠棲し、人々に見捨てられた侘しい余生を送った。

彼女は栄華を誇った得意の絶頂から一転失意のどん底に落ちた女性である。しかし、一門滅亡の怨恨、唯一人生き残った事への悔恨を乗り越え、縁者の冥福を祈ることに生きがいを見出し生き延びた、逞しく勇気ある女性とも言える。

この建礼門院の故事からみて、「失意にある社会的敗者が恥を忍んで生き延びる勇気を感得する場所であること」に、大原の文化的価値があると思う。

ちなみに、建礼門院の閑居跡である寂光院は、淀君により再興されたと伝えられている。小谷・北庄

と再三の落城の痛手から立ち直った淀君も、この地で感得することがあったのではなかろうか。

3. 大原の文化的価値の持つ現代的意義

現代にも得意の絶頂から急転社会的敗者に落ちる者が多くいる。

大臣になり世を時めいていた政治家や世界を舞台に闘った有能な商社マンで、事件に連座して失脚した者、窓際族にされたエリートサラリーマン、二十歳過ぎて只の人になったかつての神童など、栄光の過去と失意の現在のギャップに悶々の日々を送るものは多かろう。また、事あり夜逃げに追い込まれた家族、離婚した夫婦、別れ話を持ち出された恋人など、今までの幸福と今の不幸のギャップに苦悩の日々を送る者も多かろう。

この様な失意の者の中に、この地を訪れ建礼門院の故事に触れ、新たな出発の勇気を湧かせるものが少なからず居るのではなかろうか。

4. ダンプカー通行の大原の文化的価値に対する影響について

(1) 文化的価値を低下させるという考え方

ダンプカーの通行が大原の文化的価値を損ねるかどうかについて、先ず次のような考えが出来よう。

隠棲と言うことから静寂が連想される。静寂こそ大原の文化的価値発揮の必須条件である。ダンプカーの通行は静寂を著しく阻害する。従って、ダンプカーの通行を阻止しなければ大原の文化的価値は低下する、と言うものである。

確かに大原の里は今も静かな小盆地の中に有り、建礼門院ゆかりの寂光院は谷の中にひっそりとたたずみ、ダンプカーの喧騒はとても耐え難く思われる。

しかしながら、この考え方とは異なる次のような考え方が出来ないだろうか。

(2) ダンプカーの包含する意味

ダンプカーは、その無骨な姿やほこりを巻き上げて走る走行時の雰囲気から、エネルギーギッシュで荒々

しい坂東の武者を連想させる。そこで、ダンブカーの建礼門院の里通行を、平家の落武者狩りと見ることが出来ないだろうか。つまり、源氏は、壇の浦の戦勝の後、平家の落ち武者狩りを全国に展開してきたが、最後の大物建礼門院がこの里に隠れ住むと言う噂を聞き、捜索の武者を大挙派遣してきたと見るのである。

表-1 ダンプカーと建礼門院のイメージするもの

ダンブカー	男性	源氏の武者	武家	関東的論理
建礼門院	女性	平家の公達	公家	関西的論理

さて、ダンブカーの通行をこのように落ち武者狩りと捉えるとき、その通行許可と通行阻止はどの様に解釈されるのであろうか。

（3）通行阻止と通行許可の包含する意味

通行阻止はその断固たる態度から武断的なイメージがする。つまり、通行阻止は落ち武者狩りに対し武力で対抗することを意味する。武力は武家政権のもの、すなわち関東的論理に基づくものと言える。したがって、通行阻止は、関東勢力の侵入に対し、京都の大原が関東的論理で対抗することになる。通行阻止の断行は、源氏の武者に怪しまれ、建礼門院の存在を確信されてしまわないか。徹底的に調査され、抵抗は優勢な武力で押え込まれ、やがて発見され、関東へ連行されてしまうだろう。

一方、通行許可は、源氏の武者の探索に対し、そう言う人はいませんが、不審であればどうぞ納得のいくまでお調べ下さい、捜査には協力いたします、という態度を取ることに当たるのではないか。里人が知恵を絞って建礼門院をかくまい、源氏の武者に大原を右往左往させるのである。そのうち諦めて立ち去ることが確実なのである。

表-2 通行阻止と通行許可のイメージ

通行阻止	武力的対応	関東的論理
通行許可	知力的対応	関西的論理

（4）文化的価値を高揚するという考え方

武によらず知の力で活路を開くと言うのが京都の伝統的な生き方である。建礼門院の時代をみても、後白川法皇がそうであった。平清盛が強くなれば木曾義仲に、木曾義仲が目に残れば源頼朝に追討させるというように、知力で難局を切り抜け自己の立場を維持しようとしたのである。武力に頼れば後鳥羽上皇の承久の乱のように失敗したのである。

この様に、通行阻止は関東的論理であり京都の生き方の伝統に反するといえないか。今まで長年かけて確立した大原の存在価値を危うくさせよう。通行許可は関西的論理であり、ダンブカー＝源氏の武者を出し抜くことにより、大原を愛する人々の喝采をあげ、その存在価値を逆に高揚する事になるのではなかろうか。

5. むすび

その隠棲以来八百年に渡り建礼門院を守り続けてきた大原の里人にとり、騒々しいダンブカーの通行は心落ち着かない事であろう。また、大原の文化的価値侵害を心配する人々の気持ちもよく理解できる。しかし、本文のように考えれば、ダンブカー通行は必ずしも文化的価値を損傷する事にはならないので、少しはその心配を和らげていただけるのではなかろうか。「ダンブカー－男性－源氏の荒武者－武家－関東的論理」の侵入に対し、「通行阻止－武力－武家－関東的論理」で対抗するのではなく、「建礼門院－女性－平家の公達－公家－関西的論理」で対抗しようではないか。

本文はある土木事業に関わる特定地域の文化的価値への影響を考察したものである。客観的な評価とは言えず主観的・一方的な私見を主張したに過ぎないし、別の地域のダンブカー通行の影響評価にこのまま使用できると言う方法論の普遍性もない。しかしながら、文化都市を標榜する京都で土木事業を実施しようとするれば、文化的価値を前面に押し立てた反対意見も登場する可能性があり、影響評価が必要になってくる。一般的な方法論と客観的な許可基準確立の可能性の如何に関わらず、ケースバイケースの評価の積み重ねが必要でなかろうか。強引さは承知でこのような考察を試みた。本文が少しでも土木事業の進展に役立つ事を願う次第である。